主論文の要約

論文題目：向社会的な嘘の個人間機能と個人内機能
氏名：田口恵也

「オオカミ少年」や「金の斧」の寓話，「嘘つきは泥棒の始まり」という諺が象徴するように，人は嘘をつくことは避けるべき行為であると捉えている。嘘をつくことが望ましくない行為であるという知見は，心理学や哲学の分野で示されてきた (e.g., Backbier, Hoogstraten, & Meerum Terwogt, 1997; Bok, 1978 古田訳 1982)。また，嘘をついたことが明らかになると，他者からの好感度が下がる (Tyler, Feldman, & Reichert, 2006)，対人関係が悪化する (McCornack, & Levine, 1990) ，嘘をつく以前と同程度まで回復させることが困難なレベルで相手からの信頼を失う (Schweitzer, Hershey, & Bradlow, 2006) など，嘘が対人場面で望ましくない結果を引き起こす可能性も示唆されている。

嘘が望ましくない行為であると捉えられているのであれば，嘘をつくという方略は淘汰され，日常生活の中で利用されなくなっていてもおかしくはない。しかし，嘘をはじめとする他者を欺く行為は日常の中で観察されている (Serota, Levine, & Docan-Morgan, 2022)。これは，嘘が望ましくない行為であると同時に，円滑な社会生活を送る上で役立つ機能を備えているためであると考えられる。先行研究からは，遅刻をした弁明として本当の理由を伝えずに嘘を用いることで聞き手のネガティブな感情が抑制されること (菊地・佐藤・阿部・仁平, 2008)，自分が否定的な評価を持つ他者の趣味について感想を聞かれた際に真実を伝えずに嘘を用いることで聞き手のポジティブ感情が促進されることなど (菊地・佐藤, 2016)，葛藤回避の方略として嘘を用いることが，より良い対人関係の維持に役立つことが示されている (Buller & Burgoon, 1994)。嘘の中でも，他者のためにつく向社会的な嘘は，対人関係を円滑にする社会的潤滑油としての機能を有していると指摘されてきた (Saxe, 1991)。

しかし，先行研究では，①主に発言者と被発言者の二者関係の間での向社会的な嘘の機能を想定しており，向社会的な嘘が周囲を取り巻く人々との間でどのように機能するのかは十分には検討されていないこと，②対人関係の良好さのような，向社会的な嘘の個人間機能についてはこれまでにも検討されてきたものの，精神的健康のような個人内機能については明らかにされていないこと，③向社会的な嘘の機能を検討する際に対人関係の性質について考慮されていないことという 3 つの大きな問題点があった。

そこで，本研究では，大学生を対象とした 5 つの研究 (研究 1~5) と中学生・高校生を対象とした研究 (研究 6) を通して，向社会的な嘘が持つ個人間機能と個人内機能について，第三者視点からの評価と使用者の観点から検討し，向社会的な嘘と社会的適応の関連，ならびに向社会的な嘘と精神的健康との関連を明らかにすることを目的とした。

第 1 章では，向社会的な嘘に関する先行知見をまとめ，向社会的な嘘の機能に関する理論的背景を整理した。

第 2 章では，3 つの研究を通して，周囲の第三者の評価の観点から向社会的な嘘の個人間

機能について検討を行った。研究 1 では，嘘をつく動機が嘘に対する評価に及ぼす影響について検討を行った。その結果，嘘をつく人は真実を伝える人と比べて正直さが低いと評価される一方で，向社会的な嘘をつく人は，利己的な嘘をつく人より思いやりが高いと評価されることが示された。研究 1 から，先行研究 (Levine & Schweitzer, 2014) と同じく，向社会的な嘘が利己的な嘘より肯定的に評価されることが確認された。研究 2 では，向社会的な嘘を，嘘をつく方略によって，積極的に事実とは異なることを伝える偽装と事実を伝えない隠蔽に分け，向社会的な偽装，隠蔽，他者に不利益のある真実の 3 つの発言に対する第三者からの評価の違いについて検討した。その結果，偽装は，隠蔽や他者に不利益のある真実より道徳的で許容できると評価されることが示された。研究 3 では，向社会的な嘘を，発言者の利益の有無によって，発言者の利益を含まない向社会的な嘘と発言者の利益を含む相互利益的な嘘に分け，向社会的な嘘，相互利益的な嘘，他者に不利益のある真実の 3 つの発言に対する第三者からの評価の違いについて検討した。その結果，向社会的な嘘は相互利益的な嘘と比べて肯定的に評価されることが示された。このことから，自己利益を伴うことで，他者のためにつく嘘に対する第三者の評価が損なわれる可能性が示唆された。また，一部の評価については，他者に不利益のある真実が向社会的な嘘や相互利益的な嘘より肯定的に評価された。さらに，この結果は，評価者の嘘をつくことに対する否定的認識の強さに関わらず一貫していた。

以上の結果からは，向社会的な嘘は，第三者によって肯定的に評価されるものであり，円滑な対人関係の構築・維持に値する人物であることを周囲に伝えるシグナルとして機能することが明らかになった。研究 2，3 の結果は，事実を伝えない隠蔽よりも，事実と異なる情報を伝える偽装の方が肯定的に評価されること，また，動機に自己利益を含む相互利益的な嘘よりも，自己利益を含まない向社会的な嘘の方が肯定的に評価されることを示すものであった。ここから，特に向社会的な意図が第三者にとって明確である場合に，向社会的な嘘は第三者との関係を良好にする可能性が示唆された。その反面で，真実を伝えることによって他者が傷つくとしても，向社会的な嘘をつくことよりも真実を伝えることの方が好ましく評価される場合があることも確認された。以上より，向社会的な嘘は常に肯定的に評価されるわけではなく，状況を問わず利用した場合にはかえって対人関係の悪化を引き起こす可能性のある諸刃の剣であることが示唆された。

第 3 章では，向社会的な嘘が持つ個人内機能について明らかにするために，大学生を対象に向社会的な嘘と抑うつの関連およびその過程について検討を行った。研究 4 では，嘘の使用傾向と抑うつの関連について検討を行った。その結果，向社会的な嘘は，友人関係を良好にすることで抑うつを低下させるものの，友人関係の良好さを統制した場合には，向社会的な嘘を用いているほど抑うつが高くなることが明らかになった。研究 5 では，向社会的な嘘の使用が抑うつを高める要因として対人疲労感に着目し，向社会的な嘘と抑うつの関連の過程について検討した。研究 4 と同様に，向社会的な嘘は友人関係を良好にすることで抑うつを低下させること，向社会的な嘘を用いているほど抑うつが高くなることが明らかになった。しかし，向社会的な嘘と対人疲労感の間に関連が見られなかったため，大学生におい

ては，向社会的な嘘が抑うつを生起させるのは，対人疲労感以外の要因によることが示唆された。

第 4 章では，中高生を対象に向社会的な嘘の使用と抑うつの関連およびその過程について検討した。また，向社会的な嘘の使用傾向の発達差についても検討を行った。その結果，大学生と同様に，中高生においても向社会的な嘘を用いているほど抑うつが高くなることが明らかになった。さらに，向社会的な嘘の使用と抑うつが関連する過程については，大学生とは異なる結果が得られた。まず，中学生では向社会的な嘘が友人関係の良好さの低減を介して抑うつと正に関連したが，高校生では向社会的な嘘と友人関係の良好さに関連が見られなかった。その一方で，中学生と高校生のどちらにおいても向社会的な嘘が対人疲労感を高め，抑うつと正に関連することが示された。なお，中学生と高校生の間で向社会的な嘘の使用傾向に違いは見られなかった。

以上の結果から，向社会的な嘘の使用は従来の研究 (Saxe, 1991) で考えられていたような対人関係を良好にする適応的な機能だけではなく，抑うつを高める非適応的な機能を併せ持つこと，この非適応的な機能は青年期において一貫していることが示された。これらの結果から，向社会的な嘘に依存したコミュニケーションは，少なくとも青年期においては個人の内的適応に悪影響を及ぼす可能性が示唆された。

また，向社会的な嘘が抑うつと関連する過程については，学校段階による違いがあることも明らかになった。中学生では向社会的な嘘の使用が友人関係を悪化させ，対人疲労感を生起させるものの，その後，高校生，大学生と，学校段階が上がるにつれて，向社会的な嘘の使用は友人関係を良好にし，対人疲労感は生起しなくなることが示された。

ただし，本論文の課題として，研究手法が場面想定法による質問紙実験あるいは質問紙調査に限られていたことが挙げられる。場面想定法による質問紙実験は架空のシナリオを設定し，実験参加者にシナリオの状況に直面したことを想定させるという手続きから，現実性の低さが指摘されている (坂元, 2017)。また，質問紙調査による知見はあくまで相関関係に基づく知見であり，因果関係ではない。そのため，本論文の想定とは逆の因果関係，あるいは相互的な因果関係が存在している可能性も考えられる。したがって，今後は，実験室実験やフィールド実験，縦断調査など，多角的な研究手法による検討を行うことで，向社会的な嘘の機能についての因果関係を確かめていく必要があると考えられる。

本論文には課題が残されているものの，これまでの向社会的な嘘の個人間機能に関する知見を拡張し，精緻化したという点で学術的な意義がある。また，向社会的な嘘と個人間適応・個人内適応の両者の関連を包括的に捉えたことによって，向社会的な嘘の使用が被発言者や第三者との関係を円滑にする反面で，個人の抑うつを高めるという非適応的な機能を持つことを新たに明らかにしたことの意義は大きい。この知見は，向社会的な嘘の使用によって，円滑な関係を維持するために精神的健康を犠牲にする人々が存在していることを意味するものである。今後は，対人関係を良好に保ちつつ個人の精神的健康も維持する，内外の適応のバランスの取れたコミュニケーションのあり方を明らかにしていくことが期待される。